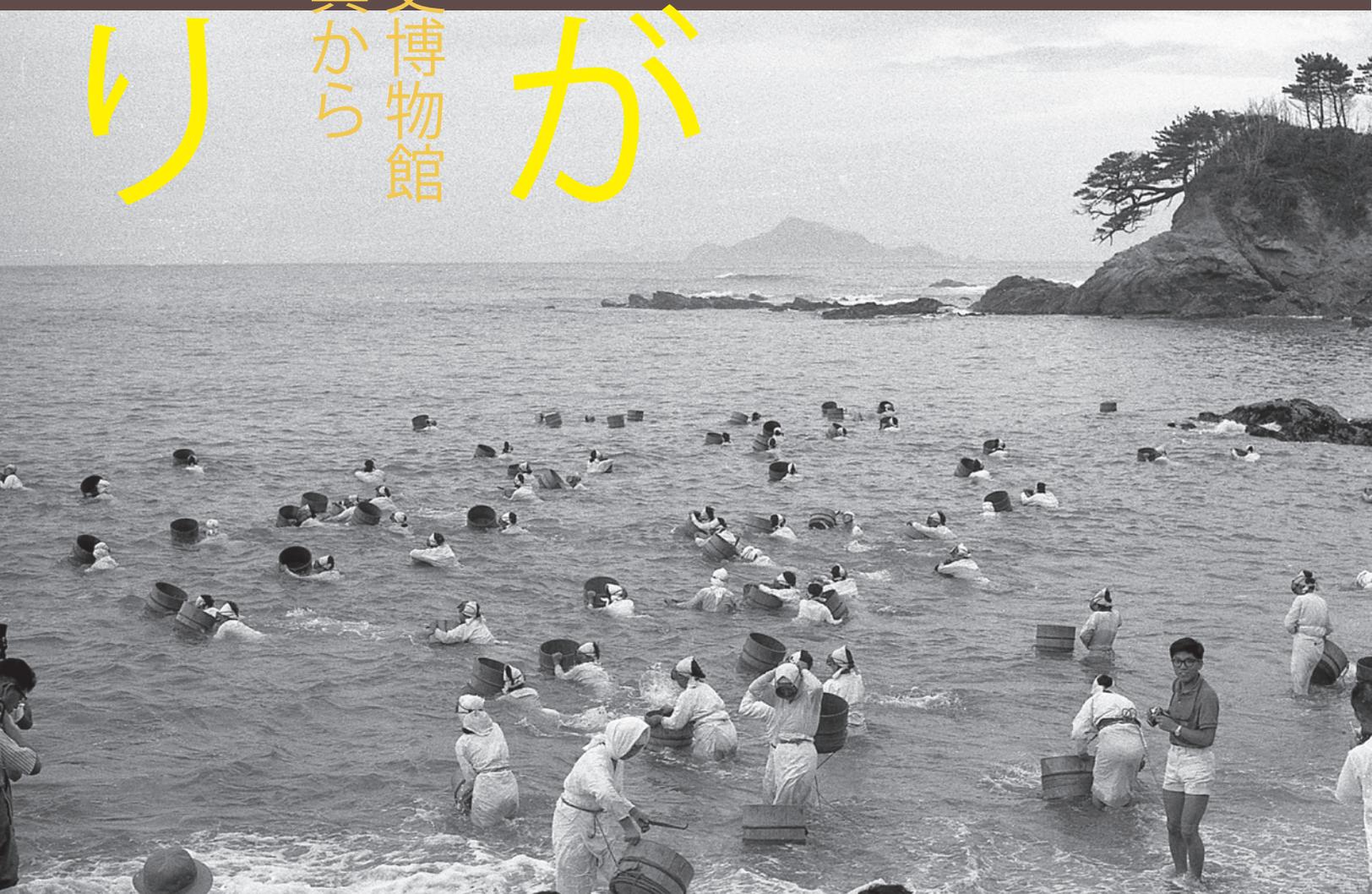


文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業（平成22年度～26年度）

三村幸一が撮った日本の祭り

大阪歴史博物館
所蔵写真から



ごあいさつ

「三丁目の夕陽」という映画がありました。同名の漫画をもとにしていますが、自動車修理工場を営む家族の慎ましやかな中にも希望溢れる生活が、竣工しつつある東京タワーとともに描かれています。高度成長期に入ろうとする東京の物語でしたが、その時、日本の田舎や地方で人々は、どのような暮らしをしていたのでしょうか。今回の企画展「三村幸一が撮った日本の祭り」は、それを雄弁に物語るものです。被写体である人々の姿と表情にわたしは、豊かな日本を感じます。

七〇歳を超えた三村が、わずか一日のオコナイの撮影に、滋賀県伊香郡鷺見地区（現在の長浜市余呉町鷺見）に入り、豪雪のために一五日間も閉じ込められた時の体験を記した随想「鷺見滞在記」に、こんな一文があります。

「毎日毎日雪が降ろうと風が吹こうと、写真機を持ってうろついていたが、何が面白いのかわしには解らん。たいがいやになってやめるだろうと思うとった。雪のない大阪から来る」と、そもめずらしいものかな。」

滞在一五日目にしてやっと、村から抜け出すことが出来たときの地元の人との会話である。これを聞き三村は、「言いたいことを自由に言う人たちである。私はそれを聞きながら、なんだか頭がスカッとして気持ちよかった」と書いています（『まつり通信』一七一、昭和五〇年）。

企画展には、選りすぐりの写真六〇点が展示されています。これだけの写真を撮る人は、どういう人であったのだろうか。「祭りの人々」という被写体だけでなく、撮った写真家にも想像を及ぼしたものです。その目と興味がなければ、こんな写真は残らなかつたからです。

最後になりましたが、貴重な写真資料を提供していただきました大阪歴史博物館に心より御礼申し上げます。

関西大学大阪都市遺産研究センター長 藪田 貴



二木島祭【1959（昭和34）年】三重県熊野市二木島町・南母町

熊野灘に面した二木島湾では、湾口の北側に阿古師神社、南側に室古神社がまつられており、11月の祭りでは、当屋の主人のショウドたちが2艘の関船で両社を廻り、それぞれの境内で氏子たちが着座して甘酒と切り分けた魚をまわす儀式が行われます。写真は正面に座る2組の神役たちで、右端から、ショウドの従者のサカイキハヤシ、ショウド、関船の舳先で踊る踊り子、もとはショウドの妻が勤めていた打掛け姿のガズ、その付き添いで同じ打掛け姿のガズトモ、当屋の世話をするババと呼ばれる女性たちが並びます。なお、この祭りは2010年を最後に中断しています。

写真家 三村幸一について

三村幸一は1903（明治36）年生まれの写真家で、道頓堀の歌舞伎や芝居、能・狂言などの写真を多数撮影しました。なかでも文楽を撮った写真は評価が高く、国立文楽劇場の公演パンフレットや解説本にも使用されました。1994（平成6）年には戦前から50年以上にわたって文楽を撮り続けた功績が認められ、国立劇場文楽賞の文楽特別賞を受賞しています。さらに、近畿民俗学会にも所属し、日本各地の祭りや行事、民俗芸能の撮影も行いました。著書には、『文楽』（講談社、1959年）、『化粧地蔵 こどもの神さま』（淡交社、1973年）、『カラー文楽の魅力』（淡交社、1974年）、『神楽面』（淡交社、1975年）などがあります。



平尾のおんだ【1962(昭和37)年】
奈良県宇陀市大宇陀

1月18日の夜、水分神社の境内の舞台上、大頭・小頭のふたりの頭人と早乙女に扮した子供たちが、鍬入れや水入れ、種蒔きなど一連の米作りの所作を演じて、一年の豊作を祈願します。田植えの所作が終わると、全身にこよりを結びつけた若宮さまと呼ばれる面を付けた人形が登場し、参拝者たちは自分の身体の調子が悪い箇所のこよりを貰い受け、患部にあてて治療を願います。

多聞寺の鬼追い【1964(昭和39)年】
兵庫県神戸市垂水区

宮中では、大晦日に疫病を祓って新年を迎える追儺の儀礼が行われ、現在も年頭や節分に鬼追いの行事が行われます。1月5日の多聞寺の鬼追い(追儺式)では、身体に藤蔓を巻き付けて、槌・鉞・鉾を持った3匹の親鬼と、4匹の子鬼が登場して踊ります。燃える松明を振りかざし、餅や造花を見物人たちに撒いて厄を祓います。



太福寺の雀の頭【1964(昭和39)年】
兵庫県神戸市北区

道場町の太福寺で、毎年2月11日に行われる年頭の行事です。その前年に生まれたこどもの村への仲間入りと成長を祈る行事で、大般若経の転読が行われます。堂内には、朴や白膠木の木を使って雀とされる雌雄の鳥が巣ごもりする姿のつくりものが100本ほど飾られ、こどもたちには疱瘡除けの護符とともに配られます。





北野天満宮のずいき祭

【1960（昭和35）年】京都市上京区

北野天満宮では、秋祭に「ずいき神輿」がつけられます。神輿の屋根など主要な部分はずいき（里芋の茎）を用い、赤茄子や唐辛子など秋の野菜や果物で飾ります。側面は、湯葉や麩を使って伝説の一場面を表したつくり物が飾られます。10月4日の還幸祭には、鳳輦とともにずいき神輿も町内を巡行します。写真は、現在の中京区西ノ京中保町の妙心寺通りを東へ進んでいく様子です。

老杉神社のオコナイ【1963(昭和38)年】 滋賀県草津市下笠町

滋賀県では、年の初めに豊作とよい一年になるように祈願する行事を、広くオコナイと呼んでいます。2月15日に行われる老杉神社のオコナイでは、大殿村や細男村といった祭を行う8つの組織の代表である老長・脇老長わきおとが集まります。写真は、拝殿に並んで供物の膳を食べる直会なおらいの様子です。



みずみ 水海の田楽能舞【1960（昭和35）年】 福井県今立郡池田町

鵜甘うかん神社で毎年2月15日に行われる水海の田楽能舞では、からすとび・祝詞・あまんじゃんごこ・あまの田楽4曲と、式三番・高砂・田村・呉服・羅生門の能舞5曲が奉納されます。写真の「祝詞」は、翁面をつけ、左手に竹の先に紙を挟んだチリと呼ばれる棒を持ち、拍子をとるため時折右手の扇で打ちながら祝詞を唱えます。



長浜曳山祭【1961(昭和36)年】滋賀県長浜市

長濱八幡宮の祭りは、毎年4月9日から17日に行われ、その一番の見どころは、曳山の上で10才前後の男子たちが演じる歌舞伎です。この地では、歌舞伎のことを「狂言」と呼び、現在は毎年4基ずつ交代で狂言を奉納します。写真は、神社の前の道路を巡行する宮町組の高砂山たかさごさんの様子を撮影したものです。



地黄のすすつけ祭り【1960(昭和35)年】奈良県橿原市地黄町

奈良盆地では、端午の節句にこどもたちが参加する野神祭りが行われます。地黄町の野神祭りも5月4日から5日にかけて行われます。とくに4日はすすつけ祭りと呼ばれ、年長のこどもたちが鍋底のすすを年少のこどもたちに塗っていきます。のちに墨に変わりましたが、村の中や田畑を追いかけあっている様子が写されています。都市化が進み、人麿神社の境内の中だけで行うようになりましたが、少子化のために現在は中断しています。



おおみ ほうか
大海の放下【1961(昭和36)年】愛知県新城市大海

放下は愛知県東部に見られる旧盆の芸能で、大団扇を背負い、胸に太鼓を抱えた踊り子たちが念仏と風流唄に合わせて踊ります。8月14日・15日に泉昌寺を出発した放下の一行は、初盆の家々を訪れて踊りを披露し、新仏の霊を供養します。初盆の家の前では燈籠をかがげ、地面には子どもたちがつけた松明が燃えています。



蔵王堂の蛙飛び【1961(昭和36)年】奈良県吉野郡吉野町

7月7日(旧暦6月9日)に行われる吉野山金峯山寺の蓮華会のなかで、蛙飛びの行事があります。修験者を侮辱したため大鷲に岩屋へ連れ去られた男が、それを悔いたため、寺の高僧の法力によって蛙の姿に変えられて救出され、さらに蔵王権現の前で人間の姿に戻されたという伝説を再現したもので、輿に乗った青大蛙が山内をまわり、蔵王堂にまつられた蔵王権現の前で人間の姿に戻ります。修験者が法力を競いあう、験競べの一種であったと考えられています。



嘉幡の結鎮【1962(昭和37)年】
奈良県天理市嘉幡町

奈良県では、年の初めに弓打ちを行い、1年の災厄を除いて招福を祈願する行事があり、ケチンやケイチン、ケッチンと呼ばれ、「結鎮」「花(華)鎮」などの字をあてます。嘉幡町菅原神社では、毎年選ばれた宿の家の庭で、神主が祝詞をあげた後、梅の弓に女竹の矢をつがえ、天・南・北・地の方向と、箕の端に立てた鬼と書かれた的を射ます。最後にその弓をふたつに折って、屋根の上に放り投げます。1980年代に途絶えてしまった行事の様子を伝えている写真です。

川合の神楽【1962(昭和37)年】
岡山県高梁市川上町

岡山県西部には、カマドの神をまつ荒神信仰にもとづく「備中神楽」が伝わっています。5年や7年といったその集落ごとに決まった間隔で、^{いづの}神殿とよぶ仮設の小屋に神々を勧請して奉納されます。神殿の内部は、周囲に幣を巡らせ、天井から天蓋が吊されており、正面で二人の神職が祈り、別の神職が背後で神楽を舞う様子がとらえられています。



新日吉祭

【1961(昭和36)年】京都市東山区

新日吉神宮の祭りは、平安時代末期に「小五月会」として記録に残っていますが、戦国時代に中断し、江戸時代に復活しました。江戸時代の祭りでは、朝廷から寄贈された^{けんぼこ}剣鉾と呼ばれる豪華な意匠の祭具が祭りを彩るようになりました。剣鉾は7つの町から出され、神輿(現在は鳳輦)とともに巡行しました。現在では各町内とも鉾を飾ることはあっても、渡御列に参加することは少なくなりました。これは大宮鉾の写真です。





三村幸一が撮った日本の祭り

大阪歴史博物館
所蔵写真から

文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業（平成22年度～26年度）

春日若宮のおん祭【1962（昭和37）年】奈良県奈良市春日野町

春日若宮社のおん祭は、平安時代に始まる奈良を代表するお祭りです。12月17日未明に若宮神を本殿から奈良国立博物館の南側にある御旅所へ遷し、午後には神事や芸能を奉納します。写真は、「お渡り式」の様子で、写真の翌年に取り壊される旧奈良県庁舎前を、近鉄奈良駅方面に進む猿楽、五色の御幣と花笠を運ぶ田楽、馬に乗った「馬長見」の一行が見えます。

〔表紙〕菅島のしろんご祭り【1963（昭和38）年】三重県鳥羽市

菅島は、古くからアワビなどの海産物を伊勢神宮に奉納していました。島の北東の海岸は、しろんご浜とよばれ、白鬚神社がまつられています。普段は禁漁の場所ですが、旧暦6月11日（現在は7月）の祭りの日だけは、アワビを捕って神社に奉納することが許されます。集落から山の中を通して浜に降りてきた海女さんたちは、長老の吹く法螺貝の合図とともに、白い磯着姿で一斉に沖の岩場へ向かって泳ぎ出します。

凡例

本リーフレットには、大阪歴史博物館が所蔵し、センターがデジタル化を進めている三村幸一撮影の写真資料のうち、日本の祭りを撮影したものの一部を収載した。撮影年は、【 】を付けて記した。

- 監修：黒田一充（センター研究員）・澤井浩一（大阪歴史博物館学芸員・センター非常勤研究員）
- 編集・執筆：黒田一充・吉野なつこ（センターリサーチ・アシスタント）
- 協力：内田みや子、齋藤冬華、櫻井優子、藤岡真衣、三原奈美、宮野ともみ、森本安紀、横谷友美

2013（平成25）年11月16日発行

編集・発行／関西大学大阪都市遺産研究センター

〒564-8680 大阪府吹田市山手町3-3-35

電話：06-6368-0095 FAX：06-6368-0092